

月 報	日本キリスト改革派 横浜中央教会	2012年 2月18日 2 月 号
-----	---------------------	----------------------

僕 シモベ

C.K

あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。
ルカ17；10（7～10）

創造主に造られ、はむかい、罪の滅びの中にうごめいて居た、罪人である私達（僕達）を憐れみと慈しみを持って、主イエス・キリスト様を遣わし、創造主（神）に立ち返る様になされた創造主（神）と我々の関係はどの様な物なのでしょう。

大教理問答書の序説・人生と聖書（問1～5）に一章「人生の目的」が在り、二章「神を知る道としての聖書」が示されています。

問一 人のおもな目的は、何で在るか。

答 人間のおもな、最高の目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を全く喜ぶことである。

と在ります。

創造主により造られた我々人間は、創造主に因って造られた被造物・作品であります。創造主は、ご自身のために被造物を造られました。最後に被造物を管理する者として、創造主の栄光を現すものとして、ご自身に似せてアダムとエバを造られました。アダムとエバが神様と同じに成ろうと思い手を出さなければ、創造主の造られたものは、非の打ち所も無い完璧なものでした。アダムとエバは創造主の働き・作品を自ら喜び褒め称えために造られました。その子孫である私達も創造主を褒め称えるのが神様から造られ、今地上に在る理由です。しかし、アダムとエバの過ち（善悪の知識の木の果実を食べる・高慢な行為）から。死ぬ者と成りました。この様な滅びの中にある全人間（主イエス・キリスト様を除く）を創造主（神）は憐み、御子イエスキリスト様を遣わし、我々人間の罪の贖となさいました。

キリスト者は、御子の贖により造られた目的に奉仕し、再び創造主（神）を褒め称え崇める者にされた人々です。

今年は、年頭から「聖書の通読」をと、特に呼び掛けられています。聖書66巻を読み通すのは簡単では在りませんが、計画を立て、創造主が与えて下さった、創造主からの我々僕へのメッセージを信仰を持って読み、父なる神様の御心を正確に掴み主の憐みに応えましょう。

今から 15、6 年も前のことです。とても小さな、けれど私にとってとても大切な、生涯忘れられないひとつの出来事がありました。

ある寒い冬の日のこと。もうすっかり日は暮れて辺りは真っ暗でした。私は、ある場所に行こうと必死で自転車をこいでいました。その場所へ行くには、少し暗い大きな公園を抜けなければなりません。街灯のたくさんある、明るい道から夜の公園へ入っていくのは少し勇気が入りましたが、その公園を抜けるのが近道だったのです。急いでいたこともあり、わずかなためらいの後、私は公園へ入って行きました。入口から近いところは街灯がたくさん立っていてわりと明るかったのですが、公園の中央付近に近づくにつれ、街灯の数が減っていききました。するとそのとき、パチン！（と音がしたかは覚えていませんが）自転車のライトが消えてしまいました。おそらく電池が切れたのでしょう（当時、私の自転車は自動発電式ライトではありませんでした）。少し怖かったのですが、まだ街灯は少しあるし、まあ大丈夫だろう、とにかく早く公園を抜けてしまおう、と私は先を急ぎました。しかし周りに人は誰もいません。辺りは一層暗くなっていきます。次第に不安が増していききました。そしてついに街灯が一本も立っていない真っ暗なところに来てしまいました。そこは T 字路で、左に曲がらなければいけないのですが、あまりにも暗く先が見えません。見慣れている道のはずなのに、まったく知らない場所に迷い込んでしまったかのようで、ついに私は止まってしまいました。とても真っ暗で本当に怖く、足がすくんでしまったのです。一度止まってしまうと、もうそこから進むことができなくなってしまいました。行かなければ、と思うのですが、足が動かないのです。私は必死で神様に祈りました。「神様、助けて！」と、そのときです。T 字路の右の方からひとつの明かりが見えました。だんだんこちらにやってきます。ドキドキしながら待っていると、なんとそれは自転車の明かりでした。ライトをつけた自転車が一台やってきたのです。しかもその自転車はそのまま直進していききました。そう、私が行きたかった方向です！まさに天の助け！神様、ありがとう！

私は急いでその自転車についていき、無事に次の街灯のある交差点へと進むことができました。そして私は右に、その自転車はそのまま直進して行ってしまいました。

あなたはこの小さな出来事をどう考えるでしょうか。人は「そんなのただの偶然だよ」と言うかもしれません。もしかしたらそうかもしれません。その自転車の人は、ただその人の進むべき道を行っていただけなのですから。しかし、私にとってはその明かりは神様からの助けだったのです。その明かりが見えたとき、どんなにホッとしたことか。そのときの気持ちは今でも鮮明に覚えています。

しかし、こんなにも神様の存在を近くに感じながらも、それでも私は罪を犯してしまう弱い者です。しかし今振り返ると、私が神様に背いて真っ暗闇の中を歩いているとき、神様はいつもこのときのように私の足元を照らし、導いていてくださったのだと思います。

今年はどんな年になるでしょうか。神様からの明かりを頼りに、一步一步しっかり歩んでいきたいと思う今日この頃です。